

死別体験を生きること

——死者の存在感と生者の死生観

新島典子

はじめに——「死」の定義と遺族の死生観

死別体験者の人たちは、自分にとって重要な対象であった両親、配偶者、子供、ペットといった大切な家族などを失い、それらの対象不在の生活を生きてゆくことになる。そこでの死者の存在感や影響力とはどのようなものだろうか。そして、それは死別体験を生きていかなければならない遺された人たちの死生観にどのようにかかわっているのか。

現代社会における「死」の定義は、必ずしも日常生活世界で人々が有する死生観とは直結していないように思われる。一九八八年の日本医師会による生命倫理懇談会での「脳死は人の死」という提言を受け、生命倫理

の領域における議論を経て、一九九二年の政府による脳死臨調最終報告書では、「身体の基本的な構成要素である各臓器・器官が相互依存性を保ちながら、それぞれ精神的・肉体的活動や体内環境の維持（ホメオスタシス）等のために合理的かつ合目的に機能を分担し、全体として有機的統合性を保っている状態を『人の生』とし、こうした統合性が失われた状態」と定義されている。ところが、死者が臓器提供意思表示カードを保持していても、実際には有効に活用されぬことが多いという。⁽¹⁾ 脳死による臓器移植件数も実感としては少ない。⁽²⁾ 臓器も死者の体の一部であるから、とか、遺体にキズをつけたくないという感覚など様々な理由があるようだ。しかし、臓器提供に躊躇する遺族がいるのは、遺族がその遺体をただちに「死」者として同定することに違和感を感じるからではないだろうか。

現代社会では、多くの人にとって自宅で死を迎えることは難しくなりつつある。死は、本人や家族などの関係者の手を離れたところで取り扱われるようになり、脳死や臓器移植の議論は、医学や科学の知識に依拠して、生命倫理の問題として専門家によって行われている。そのため、そうした議論やその前提となる「死」の定義は、日常生活世界における当事者の実感ベースでの死生観とは必ずしも重なっているとは限らない。このような定義と実感とのずれは、当事者間に違和感を、時につらい状況を引き起こす。定義は文言化され、一般性を帯びるが、実感は極めて主観的なものである以上、個人差が大きいからである。たとえば、「いい加減に立ち直ったら」「普通は○年位で元気になるって言うけれど」といった当事者の「回復」⁽³⁾をめぐる他者の発言に当事者がつらい思いをするのは、周囲の他者による「死」の同定のタイミングと、当事者のそれとのずれに起因するものである。換言すれば、喪失体験の当事者のつらさは、喪失体験自体のつらさに加えて、周囲の他者と

のこうした「死」の実感のずれによって強化されるのである。しかしながら、周囲の他者は当事者を支えようと何らかの働きかけ、いわゆる広義のケアを行うことが多い。他者によるケアが当事者の「回復」を支援するものになるためにはどうすればよいのだろうか。

本稿ではこうした問題意識をもちながら、死別体験を経て生きる人々の「死生観」を「死」のリアリティの実感として捉えていく。そして、こうした実感のずれが顕著に現れ、死別体験者につらさを生じさせていると思われる死別体験からの「回復」の過程に焦点をあてる。さらに、つらさを生じさせる要因の一つとして、「死」者の存在感およびその影響力と死別体験者の死生観との関係性に着目し、それらの変容と「回復」との関係性を捉えなおしてみたい。そのため、生命倫理あるいは医学的科学的な「死」の定義を一旦離れ、日常生活世界で遺族が実際にもっている死生観について、死という喪失体験からの「回復」に関わる具体的事例に即して、社会学の立場からの一考察を試みたい。

一 死別体験からの「回復」

(一) 「回復」について

身近な対象の死を体験した人たちは、その死別体験のつらさや悲嘆、時には病的症状にさいなまれるが、そこから「回復」し、あるいは「回復」を目指して、日常生活に戻ってゆくことが望ましいという共通認識を、私たちはもっている。他者との関係性によって自己が作られるとするシンボリック相互作用論者ブルーマー [Blumer, 1969≡1991] に依拠すれば、この場合の死別体験からの「回復」とは、以下のように説明できる。

すなわち、死別体験者と他者との不断の相互行為過程において、死別体験者の自己内過程である自己―自己間の対話と、他者からの承認である自己―他者間の対話によって、死別体験者の内的な「回復」や外的な「回復」がなされるといふことになる。

ところが、死別体験からの「回復」過程は、必ずしもスムーズに経験されるわけでも、キューブラー・ロスの提唱する段階に即して進んでゆくとも限らない。個々の事例ごとに様々な経緯をたどり、遺族達は大変な困難を感じる人が多い。重要な他者、大切な対象が不在となったことに起因する何らかの違和感を、死別体験者は感じざるをえないからである。この場合の違和感とは、寂寥感など様々なものであるが、悲嘆にくれる遺族は時に逸脱的な行動に出る。悲嘆理論や死別体験についての先行研究の知見によれば、遺族のそうした行動は、悲嘆に起因する症状とされる [Bowly:1960; 1961;1973;1980 Gorer 1965=1986; Harvey 2002=2003] だが、そのことに違和感を感じる周囲の他者との間にあつれきが生じることもある。このような場合、死別体験自体のつらさに加えて、そうしたあつれきが「回復」をさらに困難にする要素となる。⁽⁵⁾

周囲の他者との間にあつれきが生じる要因は様々であろうが、そのひとつとして、死別対象が本当に死んでしまったのだ、というリアリティを認容するにいたるタイミング、換言すれば、「死」の同定のタイミングが、死別体験者と周囲の他者とのあいだですべてが考えられる。さらに、個々の死別体験者が「死」のリアリティをどのように実感しているのかについても、医学的科学的な「死」の定義や議論からはこぼれおちてしまう要素があるだろう。死者の存在感とその生者の、主として遺族の死生観への影響力は、文言で定義して一般性をもたせることは出来ない類のものと考えられるからである。死者の存在感と生者の死生観への影響力

については、したがって、一般的な議論よりも、個別の事例検討を通じて、その存在感や影響力のあり方を析出する方法で、そのなんたるかを明らかにする方法をとるのが好ましいと思われる。

配偶者や家族、ペットなど身近な存在を亡くした人たちが「回復」を目指して行ったり、「回復」にいたる経緯で行う一連の言動について、筆者は非定型のインタビュー調査を行ってきた。⁽⁶⁾ その際、自分の行動や考え方が「死者に支配されている気持ちになる」とか「あなたには（亡くなった）○さんのりうつつているみたい」と言われるという話を何度となく聞いた。「回復」の契機とも関連すると思われる死者の存在感や影響力が表れているいくつかの事例を用いて、以下、本稿では、死別体験者と周囲の他者とのあいだに社会的相互行為が行われているという見地から、検討を行っていく。

(二) 遺族の有する「死」のリアリティ

死別体験から「回復」するためには、配偶者や家族、ペットなど身近な対象の死を受け入れることが必要である。対象の死を受け入れるということは、その対象がすでに「死」者であるというリアリティ、すなわち、その対象がもはや存在しないというリアリティを同定することにはかならない。しかしながら、対象の医学的な「死」をもって即座に、その対象の不在をたちまち割り切れる人ばかりではない。葬儀の前夜、私たちはその、すでに医学的には「死」者となった対象に「最後の挨拶をしたいから」通夜に訪れる。「今にも目を開いて話し始めそうな、穏やかな安らかな顔」といった表現がよく使われることからわかるように、少なくとも茶毘にふされる前まで、その対象がもはや生きてはいないというリアリティをもつのはたやすいことではない。

葬儀のあと、もはや対象の姿かたちは、生前のそれとは全く違うものとなる。しかしそれでもなお、ある時は仏壇や墓石に向かって、またあるときは心の中で、かつて生前の対象に向かって行っていたのと同様に、あるいは生前以上に親密に、話しかけたり、相談したり、何らかのコミュニケーションをはかり続ける遺族は多い。医学的な「死」からしばらく時間が経つと、その頻度が減ってくる場合もあれば、一向に減らない場合もある。こうしたケースを考えると、医学的な「死」の定義と日常生活世界での「死」のリアリティは、個人差はあるものの明らかにずれている場合がある。以下では、周囲の他者が依拠する医学的な「死」と遺族による「死」のリアリティの実感とのずれや、遺族間での「死」のリアリティを同定するタイミングのずれが、どのようにたち現れ、つらさを引き起こしているのかについて、限られた事例を使って分析を試みたい。

一一 事例分析

(一) 生前の言葉の拘束力

死者の生前の意思があたかも遺言のように、意識的あるいは無意識的に遺族の言動に影響する場合がある。これからみる事例では、脳死や心停止による「死」が宣告され、葬儀が終わってもなお、遺族の内心では、死者は生前同様に、あるいは、それ以上に影響力を及ぼし続けている。

五十代の男性Pさんは、高校の同級生Wにあこがれていた。Pさんの亡くなった配偶者は生前、Pさんにその話を聞いており、Wから同級生についての緊急時の連絡などがあるたび、「電話は取り次いでくれるのです、なんだかいらいしたり、普通とは違ってそばで聞いていたり、長電話なんてできない雰囲気」を作った

り、と、嫉妬している様子であったという。同窓会などの集まりがあると聞くと、Pさんの配偶者は、Wに再会させまいとして、Pさんに欠席を迫っていた程である。ところが、Pさんの配偶者は、亡くなる数カ月前から、「私が死んだら、あなたのことは、Wさんに引き受けてもらうつもりだから」と話していたという。Pさんは、「全く何を言っているんだ」と相手にしなかったが、Pさんの配偶者は、それから数カ月後に突然亡くなった。葬儀のあと、Wと初めて二人で食事をするようになったPさんは、その後一カ月でWとの再婚を考えた。ところが、Wに「それはPさん自身の意思なのかしら。Pさんの奥さんに操られているだけではないのかしら」と断られる。Wは、Pさんの性急さを気に掛け、一周忌もおわっていないのに、そんなに積極的になるとは、自分でなくても、誰でもいいということでは、と躊躇したのだという。Pさんは「とにかく、自分はWさんと再婚するのが筋なんだ、といった感じで、他の選択肢は無いような気持ちでした」と語る。Pさんは、自分がある種の強迫観念にかられていたのは、「死者の影響力」ではないかと言う。

死者は千里を走らせる、とは言いますが、本当に死者となっても、というより、死者となつてなおさら、自分に対する影響力は強まってきているような気がします。生きていれば、何言ってるの、と抗議も出来ますけれど、死なれてしまった人には、何も言えない、その意思の通りに行うことこそが、その人のためにもなるし、自分のためにもなるはずだ、とどこか確信めいたものさえもってしまう。自分の本来の理性が、立ち止まって考えようという慎重な姿勢が、全く保てなかったんです。本当におそれるべし、という感じです。……Wさんから、それを指摘されて、初めて気がついたんです。大体、亡くなって半年も経って

いないのに、一周忌も過ぎていないのに、再婚なんて、とんでもない話ですよ。……それに、本当は、Wさんと何度か会って、出掛けたり、話したりしているうちに、昔から抱いていた理想像とは違っているというか、違和感を感じたりすることも多くあった。でもそういうところは見ないようにしていたんです。……Wさんにしても、私がつい妻の話を頻繁にしてしまうもので、そういう時なんかは『まだふっきれていないんじゃない。まだ奥さんのいいなりなんじゃない?』とものすごく怒るんです。そういうときには、『奥さんは、Pさんの中でまだ生きていて、Pさんの人格は、二人から出来ていて、そういうPさんと私はおつきあいしているような気がしてくる』といったことをWさんから言われました。……実際に、私もそんな気(亡き妻が自分の中で生きているような気)がしていました。しばらくはずつとそのままいつも一緒にいるような感じで、妻だったなら、こういうことを言うだろう、こう考えるだろう、といったように、常に妻の判断を仰いでいるようなものでした。

Pさんは、結局Wとの交際をやめることになった。再婚を視野に入れた交際をやめることで、性急に決めなくてはならないことも無くなり、Pさんは「ようやく楽になれた」という。しばらく遺族のためのSHG(セルフヘルプグループ)に通ったPさんは、それから十ヵ月後、妻の死後にSHGで初めて出会った別の女性と交際している。「妻の知らない人ですから、妻の『影響下』にない人です。……妻のことについては、それに思い出すこともあります。また新たな人生に踏み出したいとも思っています。」といった発言やこれまでの一連の語りから、いわゆる定義上は「死」んでしまった対象についても、当事者の中では「死」の実感が

必ずしも得られぬどころか、生前以上にその影響下に置かれる場合のあることがわかる。このようなケースからは、当事者の「死」のリアリティの実感、いわゆる「死生観」が、いわゆる「死」の定義とは必ずしも重ならない場合のあることが明らかである。

(二) 死後の影響力

次に挙げる事例で、七十代前半の男性Qさんは、大切な対象が死後も夢枕に立ち、自分の言動に影響力を及ぼしているという。Qさんの大切な対象とは、飼い猫Xである。本稿で、ペットとの死別体験の事例を挙げることに、少なからぬ読者の方は違和感を覚えるかもしれない。しかし、ペットのことを人同様に、あるいは人以上に自分の家族とみなして大切に思っている人々は昨今増えており、その影響力は無視できない。⁽⁸⁾ Qさんは、飼い猫Xを事故によって亡くしたショックから「少々精神がおかしくなってしまったのではないか」と家族や動物霊園の担当者などから心配されていた。獣医師の不適格な指導を受けた妻が、食欲のないXに何とかえさをやろうとした際、不測の窒息事故によってXは死亡してしまった。Xを亡くす以前から、病弱なQさんは入院中や自宅療養中に見る夢にXが出てきていたのだと主張する。Xは、さらに、亡くなってからもそれまで以上に頻繁に夢枕に立ち、不安定な自分の仕事の行く末や、心配な子供達の将来、など諸々の出来事についていろいろなおアドバイスや予言をしてくれた。またQさんが行っていた転職活動に関しても予言をしたところ、これが見事に的中したのだと証拠の書類を提示しながら、説得的に説明してくれた。私はここでは、その当否について判断するつもりもその資格もない。ただ、このような「常軌を逸した」と家族や霊園担当者に言われ

るほどの発言を繰り返し、Xの存在意義がどれほど大きいものだったか、自分との関係性の重要性、Xの存在感の大きさについて周囲を説得しようと繰り返し行われるQさんの行為を分析する過程を通じて、大切な対象の死後における影響力と遺族の死生観の関係性の実態がつまびらかにされると考えている。

以下は、Qさんから頂戴した沢山の手紙のうちの一通から抜粋したものである。類似の内容が書かれた沢山の手紙や電話、そしてファックスには、一貫して以下の内容が主張されていた。つまり、Xが夢で話したこと——自分の就職試験合格を現実に予想するものだったり、本当に叶った予定外の収入の知らせだったりするのである——をいずれも日記やファックスなどの証拠物件を提示しながら、へいずれにしても普通の猫ではないのだ。だから、夢の世界での交信が可能であり、またその予言内容も真実だ。それを信じる自分も何ら異常ではない。むしろ、このような猫と飼主との関係があることを、論文などで世間に知らしめて欲しい。それをXも望んでいる。〉ということ、何回も筆者に対して説得しようとするのである。

……(略)……今朝方、Xが夢に現はれ、「ママはとても良い人です。只、余りの悲しさですっかり変わった様に見えますが、XY寺、ここの動物霊園で、パパがしょっちゅう会っているV(霊園担当者)さんに頼んでごらん下さい。ファックスがよいでしょう。……(略)……(という文面をVさんからママに)簡単にファックスして貰って下さい。Xがパパにお願いしていた事が之で実現します。」枕元に置いてあるメモ用紙に、ライトペンで書き止めました。(これで、筆者の調査に懸念を抱いて反対していたというQさんの妻も協力的になり)新島様にも気兼ねなく、ご協力できるように成ります。……(略)……

「予言」の中には、転職活動が予言先の会社に決まってしまうなど、筆者もその実現を確認して、実際に驚いてしまったことも少なからずある。そして、実際にQさんは「Xの言うとおりにしたら、うまくいくんです。本当に守護神として、私のことを今もずっと守り続けてくれているんです。」と言う。

しかし、Qさんのこのような言動、つまりXとの「夢霊交信（とQさんが名づけているもの）」の真実性を主張することで、Xの存在感を周囲に承認させ、Xと自分との関係性についての見解を共有させようとする一連の行動は、家族からの激しい反発や、蔑視を招き、「精神病だ」というレッテルを貼られているのだとQさん自身は言う。しかし、Qさんは、Xの「死」後もなお継続する存在感や影響力について、確信しきっているだけなのである。家族はそんな自分を相対的に客観視できていない、とQさん自身と家族とのあいだで、「死」のリアリティがずれていることを示唆する。Xの「死」後もなお継続する存在感や影響力の理由について、Qさんは先祖の代から動物を愛好してきたことと、生前のXによくお刺身をたらふく食べさせて可愛がってあげたということに帰結させている。QさんがXの「死」のリアリティを同定するまではしばらくかかりそうであるし、あるいは、ずっと同定することなく過こしていかれるのかもしれない。

(三) 死別体験者間での「死生観」のずれ

大切な存在をなくして悲嘆にくれる死別体験者は、代わりの人を見つければ……、再婚したら元気になるから、と、早期の回復を願う他者によって、積極的な行動をせきたてられることが少なからずあるという。しか

しながら、こうした他者による対応は、必ずしも回復を促すものになるとは限らない。同種の体験をした人同士では、体験していない人にはわからないことでも共感しあえるという。だからこそ類似の体験者によるSHGなどが作られているのだと思われるが、それは、彼らが類似の死生観をもっているからなのだろうか。

同種の死別体験者同士がコミュニケーションをしあえる場には、配偶者や子供などを亡くした人向けのSHGのほか、インターネットのサイト上には死別体験者向けの多種多様な掲示板が無数に運営されている。そこでは、各人が自分の死別体験を、主に仮名で書き込めるようになっていて、他の人の死別体験を読むことも出来る。そこに書き込まれる深刻な体験記に対して、管理者が丁寧コメントを返してくれたり、書き込みをした人のメールアドレスあてに、アクセスした人が直接メールを送ってやりとりが出来るようになっていて、イトでは、自分の書き込みに対して、数カ月経ってもなお、熱心な返事のメールが届いたりするという。

配偶者に先立たれた四十代男性のRさんは、そのサイトに書き込みをした直後から、励ましの書き込みと共に、自分の話を聞いてほしいと数人から体験記をつづった熱心な返事をもらった。「やはり同じ体験者同士だから、ものすごく共感してくれるのがわかって嬉しい」という。ところが、いずれも女性からのそれらのメールには、再婚への気持ちをかかなりの意気込みで書いてくる人が多かった。それらを読むと、まだ配偶者が「死んだことを自分の中では実感できていない自分は、どう対応すればいいのか、複雑で憂鬱な気持ちになると言う。

もうその人は……第二の人生を謳歌するんだ、とお稽古ごとくも沢山やっているようなんです。だから、

あとは相手を見つけて再婚するだけなんだと。……で、ものすごく積極的で、ものすごく長文の文章を送ってきて、自分の話をぜひあなたに聞いてほしい。こういう文章（Rさんのつらい体験についてRさんが書いた文章）を書くこの人なら、私のこのつらい体験を理解してもらえそうだから、と。これまで、何年も掲示板をずっと見てきて、自分の話を聞いて気持ちをおわかってもらえそうな男性を探していたんだ、って言うんです。それで、ようやくやっとその人が見つかったって。ああ、そういうふうにも思ってもらえたんだなあ、というのは嬉しく思いました。この人は、この何年もの間、誰にも話せなかったそうなんです。……ただ、すぐにでも会いにくるって、どこでも押しかけて再婚できますからって、写真を交換しただけなのに、言うんですよね。

この女性が掲示板を利用していたのは、自分の死別体験に耳を傾け、自分の気持ちを理解してくれる男性を探すためだというが、それは、再婚相手を探すということでもあるようだ。

ちよつとあまりの勢いに、妻が亡くなってまだわずかなのに、こんなんでいいのかって。……（略）……その人いわく、本当に元気になるには、やっぱり再婚しなければいけないって言うんですよね。でも、私はそんなことは思えずに、いるわけです。その人もとてもつらいんだらうなああとということとは、同じ体験してるだけに、ほんとによくわかります。だから、余計にどう接したらいいか困ってしまう？、その人は、自分の知らないところで、ご主人に「死なれてしまって」なんとも言えない苦しみがあつたけど、「死ん

でしまった」人のことをよくよ考えても、人生なんにもならない、という気持ちで、再婚しかない、と思つたというんです。再婚すれば、新たな関係が始まつて忘れられる。そう思つたら、自分の中のご主人の大きさが変わつていったというか、存在感が変わつていったつて言うんです。忘れなきや前には進めないと、この方（女性）はとても積極的なんですけれど、でも、忘れられる前に再婚するというのは、という気持ちになつてしまいますよね。私は妻に「死なれてしまつて」、でも妻のことが片時も忘れられないで、そのつらさから逃れようと、ほんとにすぎるような思いで、掲示板を見てるんですよ。妻の思い出があまりに大きすぎて、何かというと、妻ならこう言つた、こうやるかなとか、思い出してしまふんです。自分もつらい中で、人のこととか、次のこととか、そういうことを考えるのもかなり消耗するんですよ。……（以上「」は筆者による）

かたや、Rさんが掲示板を利用するのは、いまだ存在感の大きい妻がもはや不在であるつらさから逃れるためだ、という。再婚をもちかけてくる女性と、まだ「そんなことは思はずに、いる」Rさんは、同じ死別体験者同士であるが、各人の内心にある死別対象の存在感には、明らかにずれが見られる。「死なれてしまつて」つらいというRさんは、妻ならどうするか、と何かにつけて考えるほど、いまだに妻の存在感が大きい。かたや、女性の方は、「死なれてしまつて」つらかつたけれど、「死んでしまつた」人のことをよくよ考えても、人生なんにもならないと自ら「死」のリアリティを变容させ、再婚しかないと考えている。自ら、忘れてやり直した方が人生が充実すると考えている。同様の経験をしていながら、この二人が现阶段で有する死別対象に

対する「死」のリアリテイの実感の内容や同定のタイミングは、かくも違うものである。

また、三十代の女性Sさんは、自分の社会生活への立ち直りに重要な役割を果たしたかけがえのない存在（Sさんにとっては猫Y）を交通事故で亡くした。Sさんは、二カ月前にやはり飼い猫Zを亡くした元飼主Tに「次のを飼ったら夢中でそれどころじゃなくなるって」と新しいペットの飼育をすすめられ、「前いた（Tの飼い猫の）Zちゃんが聞いたらどう思うかって悲しくなりました」という。二カ月の差でペットを亡くした者同士であっても、自分の気持ちをわかってもらえない、と話す。先ほどのRさんの事例では、Rさんと女性とは、それぞれの配偶者という別の対象と死別しているの、「死」のリアリテイの同定のタイミングがずれるのは必至のようにも思われる。また、Sさんの事例でも、Tさんの死別体験とは死別対象もそれぞれで違う猫であるし、二カ月の差があることから、やはり、タイミングのずれは想像にかたくない。

ところが、同一の死別対象に関してであっても、「死」の同定のタイミングがずれる場合もある。Tの話聞いていたSさんの配偶者Uが、次の猫を飼うように自分に促したことを話に出し、「全く、信じられない。一緒に飼ってたから（Uさんが）一番よくわかってくれてるかと思ってたのに。私が、どんなに大変な気持ちなんだか、こういうつらい部分を全然かわろうとしないなんて。Yちゃんは死んでしまったけれど、ほんとはまだ生きてるんですよ。この部屋の中で。遠くにいったわけではないの。いつも私に話しかけてくるし。ひなたぼっこしてるのを私はちゃんと感じるんですよ。それなのに、次のを飼ったら、Yちゃんは浮かばれませんよ。……一緒に住んでたって、こうなんですよ。所詮（Uさんは）他人なんですよ」と、飼い猫Yの自分の中での存在感を理解してもらえていないことを強く非難し、つらさをわかってもらえないと訴える。Uさ

んは、「死んでしまったんだから、もう遠くに行ってしまったんだから、早くYのいない生活に慣れてほしいと思うんです。もちろん、SにとってYはとても大きな存在でした。でも死なれてしまったからといって生活が成り立たないのでは、困ります。Yにいつまでも頼っている生活は、ずっと続けられるわけがなかったんだし。人間の方が寿命が長いんですね。」と語る。Sさんは、「死」のリアリティの同定にはいたっていないが、Uさんは「死」を同定しているため、SさんにとってのYは、近くに生きている存在であるのに対して、UさんにとってのYは、「死んでしまった」すでにいなくなった存在であることがわかる。

(三) 見てきた複数の事例からは、死別体験者同士の間でも、死別対象を「死」者と同定するタイミングにずれが生じていることがわかる。すると、それに起因して、それぞれが死別対象についてもっている「死」のリアリティの実感の内実がずれてしまう。すると、相手や自分の「回復」を願って、死別対象の代替を促そうとする死別体験者と、それを時期尚早に思う死別体験者との間にあつれきが生じる。死別体験者同士の場合、同種の体験者同士だから、医学的な「死」の定義とは異なる、自分が独自に有する「死」のリアリティを理解してもらえるのでは、という期待をしてしまっていることが事例からは伺える。それだけに、その期待が裏切られたときの憤りやつらさは余計に大きくなっている。SHGなどの場においては、喪失体験を語ることによるつらさの乗り越えや喪失対象の他のものへの書き換えといったいわば喪失対象や喪失体験の「代替」が「回復」には必要だと考えられている。しかしながら、喪失対象の別物との「代替」は、常に可能とは限らない。それは、死別体験者各人が「死」を同定するタイミングのずれ、すなわち、死生観のずれによって異なってくるようである。

三 死生観の変容と「回復」の契機

「死」者であるという同定のタイミンングは、自分の中での死別対象の存在感や影響力如何で決まってくる結果、医学的な「死」の定義や、周囲の他者のタイミンングとはずれることがあることが、二章の事例から伺えた。では、死別対象の存在感などがどのように変容すると、「死」を同定することが可能になるのだろうか。

事例の中で、死別対象の「死」を各人がどのように捉えているかを示す表現がいくつかあったので、それを手がかりに若干の検討を試みたい。まず、「死なれてしまつて」という表現を複数の人が使っている。そこには死者と自分との生前の関係性が強く現れていることが伺える。事例と離れて考えても、例えば、「家内に死なれて」という表現を使う人に対しては、「慣れ親しんできた二人の生活から急に一人になって、さびしかったり、家事が出来ないなど生活上の不都合があつたり、いろいろな意味で困っている」のだろうという解釈を聞き手は自然に抱いてしまう。「自分の大事な存在に、自分は置きざりにされてしまった。その結果、自分は少なからぬ影響を受けることになっている」といった受動的なニュアンスが色濃く表れている表現である。

他方で、「死んでしまった」という表現を使い始めるようになったとき、死別体験者は積極的に前進しようとしていることが感じられる。Rさんに再婚をすすめる女性は、「死なれてしまつて」つらかったけれど、「死んでしまった」人のことをよくよく考えても、人生なんにもならない、という気持ちで、再婚しかないという自覚を始めたと同時に、「死」のリアリティを変容させている。手の届かぬところに行つてしまった、という自覚を始めたと同時に、自分の中での死者の大きさが変わってきたのだと、Rさんに再婚をすすめる女性は言う。死者の死から少し離

れた位置に立ち、その死と自分の生を、切り離して考え始められるようになっていく。飼い猫YについてのSさんとUさんの「死」のリアリティの違いも、「死なれてしまった」と「死んでしまった」という表現の違いに表れていた。換言すれば、「死なれてしまった」から「死んでしまった」への変化は、対象の医学的な「死」によって影響を受け、死者と依然一体感を感じ続けるような関係性から、死者との間に客観的な距離化をはかれ、死者の影響力にとらわれぬような関係性への変容だと解釈することができないだろうか。いずれにしても、前述の事例においては、死者との関係性の変容は、医学的な「死」の定義の瞬間に起こっているのではなく、そのあとから一定の時間をかけて行われるものであった。

そうだとすれば、当事者による「死」の定義とは、医学的科学的な「死」の定義だけからなされるものではない。日常生活世界で死別体験を生きるということは、そうした医学的な定義では割り切れない、長くつらい経験を過ごしていかななくてはならない、ということである。事例を見る限り、医学的な定義によるいわば一律の線引きからはこぼれ落ちる、心情的、精神的な部分が、死別体験者のつらさを死の瞬間から長きに渡り引き起こしていた。こうした事例は、医学的な「死」の定義や、定義についての議論では解決できない領域に、私たちの死生観が存在していることを示している。

四 結び

既存の喪失体験からの回復研究では、主に他者による回復への支援に焦点があてられてきたため、他者による回復のつらさの強化については、十分に議論されてきたとはいえない。つらさの強化が、「死」の同定の

タイミングや当事者による「死」のリアリティの実感のずれに起因して生じる可能性についても、同様の状況である。死生観を他者も共有してくれていることが前提とされているため、「回復」を目指して他者によって行われるいわゆる広義のケアは、画一的かつ固定的に「支援」として捉えられてきた。「回復」支援のケアが、「死生観」のずれによって「回復」を困難にする可能性にいたっては、これまで焦点が当てられることはなかった。本稿では、そうした前提を疑問視し、同定のタイミングや当事者による「死」のリアリティの実感に留意しながらの他者とのやりとりの中で回復過程として捉えなおしてきた。そして、他者によるケアが「回復」支援となるための要件を精査するべく、「死生観」のずれに起因して、ケアが「回復」を困難にする事例の分析を試みてきた。

その結果、以下の視点が提起されよう。一つは、「回復」の探求を行う際には、認識の共有可能性や、理解の度合いについて過信するのは避けるべきではないかということである。場のメンバーの属性における同質性が、ただちに認識の同質性を意味するとは限らない。その意味で、認識の共有は、その場に限定されるものではない。つまり、相互に「共有」される属性を持たない、場の外部の他者一般との関係性においても、見出されていくだろうという視点である。その際には、同質性に慢心した「理解」ではなく、相手の「死」のリアリティの実感や同定のタイミングが自分のそれとはずれていることを前提に、相手のあるがままを理解しようとする姿勢が求められるだろう。

もう一つは、再婚や次の犬の飼育など、「回復」の方法として挙げられる代替が、必ずしも全ての人に可能とは限らない点に鑑み、安易な代替のすすめを行わないことである。代替とは、これまでの喪失対象との対象

関係にとってかわる新しいものと新しい関係を構築することである。悲嘆を引き起こすような喪失体験をした人にとっては、生前の対象とのあいだに構築していた対象関係を、新たな関係でとってかえることは、はたからの想像以上に酷であることが、インタビューには表れていた。他のもので喪失対象の代用をすべきだ、という「回復」方法の画一的な認識にとらわれたり、押し付けたりはせず、むしろ、喪失対象への思いも含めて相手を受け入れることが、「回復」を支援するケアということになるのではなからうか。これまでみてきたとおり、死別体験を生きる人々の「死生観」は、個々人により雑多で、ずれが生じることが多くある。この点を勘案するならば、本論文で依拠している相互行為論の見地から、今一度、広義のケアを問い直す必要があるだろう。ケアという言葉には、看護や世話に加えて、関心、注意、そして心配という意味が含まれる。医療専門職を主体とするケア論においてもその限界を乗り越えるためには「ケアをあくまでも「相互」行為過程として捉え返すことが必要」(三井 一〇〇四、七六―七七頁)とされている。この点を鑑みても、「回復」は、これまでの知識の蓄積から画一的に促されるべきものではなく、相手に関心をもち、注意力をもって観察するといった多様なケアを通じて、困難にされるのではなく、促されるべきなのである。

註

(1) 二〇〇四年三月末現在、意思表示カード保有者の内、脳死下臓器提供には三・六%、心停止後の臓器提供にも

- わずか一一・六%しか結びついていない〔日本臓器移植ネットワーク、二〇〇四、二頁〕。
- (2) 一九九九年から二〇〇四年三月末までに法的に脳死と判定された者二八名からの臓器移植を受けたのは総計一九名にとどまっている〔日本臓器移植ネットワーク、二〇〇四、二頁〕。
- (3) 本稿では「回復」を、当事者が自ら元気になったと思える状態に達することと捉えている。
- (4) キューブラー・ロス〔Kubler-Ross, 1969〕らによる回復段階論では、悲嘆は一連の段階から構成されるものだと考える。そして、「回復」にむけた複数段階のステージを想定し、各ステージを辿ることで「回復」をめざす。
- (5) 新島〔二〇〇二〕では、ベットをなくした元飼い主が、ベットの喪失自体に起因するつらさに加えて、ベット喪失で悲嘆にくれる自分を理解してくれない周囲の他者との間のあつれきによって、非常に困難を感じていることを、リアリティ分離の概念を用いて論じている。
- (6) 本稿の分析に用いるのは、一九九九年から現在まで、ベット喪失体験者や家族との死別体験者に対して行ってきたインタビューで収集された事例である。関東近県一円において、二十代前半から七十代後半までの、スノーボールサンプリングで確保した男女延べ一〇〇人以上に対して、一回あたり三〇分から五時間超まで、対面調査・電話調査のいずれかの方法で、筆者本人が非定型のインタビューを行った。被調査者との関係性は、以前からの知己から初対面の方まで様々で、一人あたりの調査回数は、一回から五回まで幅がある。この場をお借りして、プライバシーの抵触をいとわずに様々なお話を聞かせて下さった皆様に心より御礼を申し上げます。
- (7) セルフヘルプグループとは、専門家との上下関係下での治療ではなく、同種の体験者同士が自動的に集まり、治療目的ではなく話を聞きあうことなどを行う集団である。死別等同種の経験をもち喪失体験者たち自らが、水平な関係性の中で「回復」を助け合うべく組織するSHGでは、個々人に体験される「あるものの喪失」は、各メンバーの「あるものの喪失」と同種の「喪失体験である」という前提のもとに、互いの喪失経験を物語ることで「回復」していく過程等が注目されてきた〔Denzin, 1989=1992, McNamee&Gergen, 1992=1997他〕。そうした語りの中では、一つの回復の道筋が「物語」のかたちでメンバーによって語られ、それが共有される。詳しくは、Katz 1993=1997ほかを参照。

(8) 「世の中には、ペットを家族同様かわいがる人もいれば、ペットに人間以上の愛情を注ぐことに違和感を抱く人もいる。」「しかし現実には、人間の家族相手ではなかなかやすらげない。」「やすらぐ相手はあなた(ペット)だけ」という事態が出現しているのだ」と家族社会学の見地から山田も主張している〔山田、二〇〇四、二一三頁〕。

(9) Qさんは、あるとき、自分の父祖についての長く細かい記述を送って下さった。それには、祖父や父の代で動物をとともよく愛好し、「戦争の多かったあの(昔の)時代に、お寺で法要してもらったりしていたんですよ。…(略)…だから、動物との縁は深いです。…(略)…それをXもわかかっていて、夢でそのことについてお札を言っている」とのことだった。それについて書かれている日記では、Xが夢の中で話した言葉が一語一句書き止められていた。

(10) こどもを亡くした親向け、親を亡くしたこども向け、自死遺族、白血病遺族、ガン遺族向け等、様々な喪失体験ごとに分かれた沢山のグループが存在している。

参考文献

- Blumer,H. 1969. Symbolic Interactionism: Perspective and Method. New Jersey :Prentice-Hall, Inc. =一九九一、後藤将之訳『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』、勁草書房。
- Bowlby, J. 1960. 'Grief and Mourning in Infancy and Early Childhood', 'The Psycho-analytic Study of the Child', Vol.15.
- . 1961. 'Processes of Mourning', International Journal of Psycho Analysis, Vol.42, parts 4-5.
- . 1973. Attachment and Loss, Vol.2 Separation. London: Tavistock Publications. =一九八一、黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳『母子関係の理論II分離不安』、岩崎学術出版社。
- . 1980. Attachment and Loss, Vol.3 Loss: Sadness and Depression. London: Tavistock Publications. =一九八一、黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳『母子関係の理論III対象喪失』、岩崎学術出版社。

- Denzin, N.K. 1989. *Interpretive Interactionism*. Sage Publications, Inc. = 一九九二、関西現象社会学研究会編訳 片桐雅隆訳著代表。『エゴファミリーの社会学へ解釈的相互作用論の核心』、マクローウヒル。
- Gorer, G. 1965. *Death, grief, and mourning in contemporary Britain*. London: Cresset Press. = 一九八六、宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』、ヨルタン社。
- Harvey, J. H. 2002. *Perspectives on Loss and Trauma: Assaults on the self*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. = 二〇〇三、和田実・増田匡裕編訳、北大路書房。
- Katz, A. H. 1993. *Self-Help in America: A Social Movement Perspective*. Twyne Publishers. = 一九九七、久保絃章監訳『セルフヘルプグループ』、岩崎学術出版社。
- Kubler-Ross, E. 1969. *On death and dying*. New York: Macmillan. = 1998 『死とその過程について』鈴木晶訳 読売新聞社
- McNamee, S. & Gergen, K.J.(ed) 1992. *Therapy as Social Construction*. Sage Publication Ltd. = 一九九七、野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』、金剛出版。
- 三井さよ 二〇〇四、『ケアの社会学 臨床現場との対話』勁草書房。
- 日本臓器移植ネットワーク 二〇〇四、『NEWS LETTER Vol. 8, 2004』
- 新島典子 二〇〇一、『ペット喪失体験（ペットロス）はなぜこんなにつらいのかーリアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化についてー』、現代社会理論研究 第一号、二二五―二三八頁。
- 山田昌弘 二〇〇四、『家族ペット：やすらぐ相手は、あなただけ』サンマーク出版。

(にいじま・のりこ 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

On the Influence of the Deceased on the reality of Death

Noriko Nijima

When a family member dies, why do some bereaved people donate the organs of the deceased while others hesitate to do so? Somehow, there must be gaps between people's perception of reality when it comes to the recognition of death of their family members.

To examine the gaps, this paper focuses on recovery processes from loss experiences, and discusses the difference between their perceptions of reality, and the difference of the timing and consequence of accepting the death reality.

Firstly, we discuss how and to what extent the deceased's opinion binds the bereaved. We study the case where a husband hurried to marry his old friend, just because his deceased wife once wanted him to marry the friend when the wife was alive and knew she would die soon. For the husband, the opinion of the deceased wife is unconsciously felt as some kind of authority and it still strongly influenced him. In another case, a man lost his pet cat in a sudden accident. After that, the deceased cat often came to his bedside in his dreams, and told him what to do. And the man followed the cat as if the cat was his guardian spirit. Even after the death, the deceased even more strongly influence on the bereaved. At least for the bereaved, the deceased are still alive. In both cases, the reality of death differs a lot for each person.

Secondly, we argue the variety of timing and consequences of accepting the death reality. We focus on the interaction between the bereaved. Since they both have similar loss experiences, they are sometimes overconfident

in understanding each other very well. This makes the gap of the reality of death, among the bereaved much bigger than the gap between the bereaved and other people.

Through these case studies, it is clear that: 1) the people are different from each other, in how and what kind of reality of death they have, and 2) the timing they accept the reality is different in each other, as well. Especially, the difference of the reality, i.e., the reality disjuncture, among the bereaved, becomes more severe.

One thing we can care for recovery from loss experience is just to wait for people to accept the reality of death. The timing of accepting death depends on how much, and how long the deceased influence on the bereaved. We should accept the bereaved themselves as they are, without prejudice.